研究主題：主体的、対話的で深い学びの実現を目指して（２年次）

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
２０２２．１２．９
№４１　　文責　鹿間

自分事として考えるバレーボール

６年生の体育の授業を先生方に見ていただきありがとうございました。
研究主題に関連して、先生方から様々な助言をいただき、早速試してみました。

① 3･4時間目の練習試合の際の人数を少なくする。

３時間目の際に子どもたちと相談して５人にしました。担任は４人と提案しましたが、「4 人だと、技術的なレベルがまだ高まっていないので、ミスをして効果がない。」という意見が多く、前後半で選手入れ替えをし、すべての選手が出場できるようにしました。

子どもたちのふり返りでは、「サーブがうまく打てるようになった。」「レシーブでコントロールできた。」などのそれぞれの動きに対する技能についての記述が多くみられました。技術的な練習の場面で高まったことをそれぞれが意識してとらえていることがうかがえました。

ポジションが流動化して、ボールに対する一歩目が早くなりました。

② 5 点ゲームにする。

３時間目のゲームは５点１セットのゲームにしました。しかし、じっくりと高めた技術を意識するには５点ゲームは短すぎました。子どもたちの意見から１０点ゲームにすることになりました。

点数的に余裕が生まれたことで、「つなぎ」の意識が生まれました。特に水色チームは、レシーブが苦しくなっても、ボールを上にあげることでボールをつなぐことができました。

一つひとつの動きを高めるという前半４時間の流れは確実に子どもたちが意識し、ふり返りにも手応えを感じている様子がありました。評価の見える化、意識化が動きを変えていたと思います。

しかし、ゲームの段になると早く鋭く落ちるサーブを探求したピンクチームが、サーブで相手を崩して他を圧倒しました。「つなぐ」をテーマにしていたことの裏返しのようなプレースタイルで大きく点差を開けることになりました。自分たちで流れを変えることができなかった３チームは、「ルール改正」という選択肢は取らず、早くて落ちるサーブを何とかとることを選びました。そして、何度もはね返されました。ふり返りの言葉は、「つまらない」「人のせい」が並びました。持ちうる技術を超えたサーブだったようです。できない自分たちに腹を立て、相手に対するリスペクトも失われました。

その後……最悪の状態で終わったバレーボール。最後に相手に対するリスペクトについて話して終わりました。そしてサッカー。ある試合で７対０というスコアがありました。しかし、負けたチームにはやるべきことが見え、チームとして課題解決に専念する意思がありました。試合後相手チームの連携のうまさをたたえる言葉が発せられました。

子どもたちの見方、とらえ方の違いを考えさせられました。２つの球技の違いはどんなときに何をすべきかがわかっている違いなのではないかと感じました。その引き出しを増やしていくこと・使えるようにすることを大事にしていきたいと思いました。